

万葉集の中の名御者「王良」の歌

竹生 政資¹⁾・西 晃央²⁾

A poem on the famous Chinese charioteer WangLiang in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU・Akihiro NISHI

要 旨

万葉集巻七の1137番歌は、特にその第四句「今齒王良増」が今日なお「訓み」の定まっていない難訓歌の一つである。一般には、第三字目の「王」を「与」（または「世」）の誤りとして「今は寄らまし」などと訓まれることが多いが、多くの研究者の賛同を得るにはいたっていない。

私たちは、この論文において、第四句の「王良」を古代中国の春秋時代に晋の名御者として活躍した実在の人物の名前と解釈し、「おほらふ」（現代的には「おうりょう」）と訓むべきことを提案する。このように訓むことにより、古来難解とされてきたこの歌の「訓み」も「意味」も無理なく解説することができる。

1. はじめに

私たちがこれから考察する歌は万葉集の1137番歌である。この歌は「山背にして作りき」という題詞に続いて掲載された五首のうち第三番目の歌である。以下にこれら五首の歌を掲載する。1137番歌の「訓み」はまだすべて確定しているわけではないので、原文の未確定部分には下線を引き、訓読文の対応する箇所は空白にしている。なお、以下に示す万葉集の原文・訓読文は、特に注記しない限り、岩波書店の「新日本古典文学大系」本によった。

山背にして作りき

1135 氏河齒 与杼湍無之 阿自呂人 舟召音 越乞所聞

宇治川は 淀瀬なからし 網代人 舟呼ばふ声 をちこち聞こゆ

1136 氏河爾 生菅藻乎 河早 不取来尔家里 裏為益緒

宇治川に 生ふる菅藻を 川速み 取らず来にけり つとにせましを

1137 氏人之 譬乃足白 吾在者 今齒王良増 木積不来友

¹⁾ 佐賀大学・医学部・地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

²⁾ 佐賀大学・文化教育学部・理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

宇治人の 譬への網代 我ならば こつみ来ずとも

1138 氏河乎 船令渡呼跡 雖喚 不所聞有之 櫂音毛不為
宇治川を 船渡せをと 呼ばへども 聞こえずあらし 梶の音もせず

1139 千早人 氏川浪乎 清可毛 旅去人之 立難為
ちはや人 宇治川波を 清みかも 旅行く人の 立ちかてにする

さて、問題は1137番歌の第四句「今齒王良増」の「訓み」であるが、以下の第2節ではまずこれが過去にどのように訓まれ解釈されてきたかについて先行研究の代表的なものを掲載する。そこでは、第三字目の「王」を「与」または「世」の誤りとして「今齒王良増」を「今は寄らまし」と訓むか、あるいは「不明」として「訓みを保留」するか、いずれかの立場に分かれているのが現状であることがわかる。万葉集は約4500首の歌からなるが、これらの歌の原文の中には実際に多くの「誤字」（誤写）が含まれており、このことを考えるならば、誤字説の可能性も確かに否定はできない。

しかし、私たちはこの「誤字」説はとらない。第四句の「王良」を中国の春秋時代の実在の人物の名前だと解釈する。実際、「王良」は春秋時代の晋の大夫趙鞅に仕えた有名な御者として『孟子』や『韓非子』などの中国古典に登場する。また、中国ではカシオペア座のβ星が「王良」星と呼ばれている。以下の第3節ではこの「王良」について調べることにする。最後に、第4節では1137番歌の第四句「今齒王良増」の「訓み」とこの歌全体の解釈について検討する。

2. 先行研究

以下に1137番歌についての先行研究を出版年の新しいものから順に列挙する。記載形式をそろえるため、内容に影響を与えない範囲内で、順序や記号表記などを一部変更した。

2. 1 新日本古典文学大系の解釈^[1]

【訓読】宇治人の 譬への網代 我ならば 今は寄らまし こつみ来ずとも

【大意】宇治人というとすぐに譬えに引かれる「網代」で私があったならば、今は寄り付きたい、木の屑は流れ寄って来なくても。

○「網代（あじろ）。冬魚を寄せて取らんために、川にして置く物也。やな（簾）のやうなるさや（鞘）なり」（和漢新撰下学集）。

○「こづみ。木のくずのつもれる也」（和歌初学抄）。万葉集の「こつみ」は、「寄る」ものとして歌われている。「秋風の千江の浦みのこつみ（木積）なす心は寄りぬ後は知らねど」（二七二四）。

○第四句の原文、西本願寺本「今齒王良増」。「王」を「与」の誤字と見なし、「いまはよらまし」と訓む略解の説に拠る。「網代」→一一三五。

2. 2 新編日本古典文学全集の解釈^[2]

【訓読】宇治人の 喩ひの網代 我ならば 今は王良まし こつみ来ずとも

【大意】宇治人の 音に聞こえた網代で わたしがあったら 今頃は王良まし 木っぱなど寄って来なくてもよいが

○喩ひの網代―タトヒは諺。タトフは下二段活用だが、名詞・副詞の場合、タトヒという。宇治人という
と誰もが引合に出すあの網代、の意。

○今は王良ましー原文は、底本や類聚古集に「今齒王良増」とあり、広瀬本などには「今齒生即増」に作る。一般に「…与良増」の誤りとし「…寄らまし」とする『万葉集略解』の説が行われるが、むしろ「…守らまし」などとあるほうが分り易い。今は訓義の決定を保留する。柘（つみ）の木の枝が吉野川の漁夫味稲（うましね）という者の梁（やな）にかかって美女と化し、味稲の妻となって同棲するが、ついに昇天した、という筋の、いわゆる柘枝（しゃし）伝説（→三七八）と関係ある内容の歌か。

○こつみー木の屑。

※本文に疑問があり、歌意が明らかでない。

2. 3 講談社文庫（中西進）の解釈^[3]

【訓読】宇治人の 譬への網代 われならば 今は王良増 木屑来ずとも

【大意】宇治の人の譬えとする網代で私があったなら、今は王良増。たとえ木屑さえも来なくとも。

○網代ー網代が宇治人の譬えにされる。

○王良増ー不明。原文「王」を「世」の誤りとしてヨラマシの訓もあるが、自分の動作としたい。

○木屑ー価値低いものの代表。

2. 4 日本古典文学大系の解釈^[4]

【訓読】宇治人の 譬への網代 われならば 今は寄らまし 木屑来ずとも

【大意】宇治の人のたとえによく引かれる網代に、私なら、今こそは寄るだろうに。いつもたまっているはずの木屑などすら寄らなくても。

○宇治人の譬えの網代ー宇治の人のたとえによく言われる網代。木屑が何時も寄ってたまっている。

○木屑ー海や川の岸などに流れよる木のくず。

○男女の間のことを喩えた歌。

2. 5 澤瀉久孝の解釈^[5]

【訓読】宇治人の 譬の網代 吾ならば 今は寄らまし 木屑来ずとも

【口訳】宇治人がたとへに引く網代のやうに、自分であつたならもうよいかげんにひつかりませうものを。木の屑切などはよつて来なくとも。

【訓釈】宇治人の譬の網代ー宇治川の網代は人麻呂の作（三・二六四）をはじめよく知られてゐたので、宇治の人はそれをなにかの譬へ話にしたので、その譬へ話も當時は知られてゐたのであるが、今はそれがわからなくなつた爲にこの歌の解釈もわからなくなつたやうに思はれるのである。

吾ならば今は寄らまし木屑来ずともー第四句底本に「今齒王良増」とあり、古に「今齒生即増」と認められる文字となり、陽、矢、京に「王良」の左に。符あり、頭書に「生即イ」とある。この作類、古に訓なく、西第四、五句朱筆でイマハキミラソコツミコストモとある。仙覚の新點であるがそれでは意味がとり難い。そこでいろいろの誤字説が行はれてゐる。童蒙抄「令齒田良増（セメハタラマシ）」とし、考に「今齒世良増（イマハヨラマシ）」、略解は「王」を「与」の誤として同訓とし、考に結句の「来」を「成」の誤としてコヅミナラズトモとし、略解もそれによつてゐる。解釈としては略解に、「あじろはわれにてあらば、思人の吾によらむものを、こづみにあらずともといふ也」とある。全註釋には「生良増（ナラマシ）」として「その網代になつたらうものを」と譯し「よし木屑が来ないでも」とある。佐佐木氏は「生良」の

文字により「生」を「世」に通ずるとみてヨラマシと訓み、「若しもその網代が自分であつたなら、今こそあのいとしい人が寄つて来さうなものであるのになあ、木の切屑は来なくとも」と譯されてゐる。私注には「王良増（ワラマシ）」とし、第三句をワレシアレバと訓み「吾が今かうして来て居るからには、破り開きたいものである」と解されてゐるが、集中では「王」はオホキミと訓む事が通例であり、ワの假名には用例無く、これは誤字だと思はれる。しかし「生即」ではまた「即」の字が歌の用字として例がなく、「即」はやはり誤字だと思はれるが、「郎」「良」の誤とするとラの字音假名が上下の借訓假名との釣合がどうかと思はれる。「生」は佐佐木氏があげられた「今生（コノヨ）」（三・三四九）は流布本の誤であるが、「來生（コムヨ）」（三・三四八）の例はあつて認められる。又「來」を「成」の誤とする事、「來」の草體（下の注1参照）と「成」の草體（下の注2参照）とはたしかに似てゐるが、萬葉の古寫本にその草體が用ゐられてゐる例が殆ど無く、コヅミナラズトモと訓むと字餘例外の八音になつてその點でも従ひ難く、結句は「木積不來友（コヅミコズトモ）」であつたものと思はれる。その「木積」は、

濁見江水浮漂糞怨恨貝玉不依作歌一首

ほり江より朝潮満ちによる許都美（コヅミ）貝にありせばつとにせましを（廿・四三九六）とあり、「千江の浦みの木積なす心はよりぬ」（十一・二七二四）、「寄る木積なす寄らむ子もがも」（十九・四二一七）などともあつて、流に寄せる木の切屑である。網代には氷魚や鮫などのかかる事をこそ願へ、木積などのかかる事を願つてはゐないに、時にその願はぬ木積がかかるものであるが、その木積はよりかからずとも、自分が木積のやうに寄りかからう、とでもいふのではなからうか。とにかくこの作は第二句の譬の内容が不明であり第四句の文字に疑問があり、この程度の推測に満足するよりほかない。

注1. 𪛗 注2. 𪛗

2. 6 萬葉集全釈の解釈^[6]

【訓読】 宇治人の 譬えの網代 我ならば 今は依らまし こづみならずとも

【大意】 宇治ノ里人ガヨク譬ニスル網代ヲ、一寸私ニ譬ヘテ見ヨウガ、アノ網代ガ私デアツタナラバ、網代ニハ塵芥ガ引ツカカルモノダガ、塵芥デナクトモ、アナタハ、今度ハ私ニヨリカカリサウナモノダ。

○譬乃足白（タトヘノアジロ）—宇治の里人が、何かにつけて譬とする網代の意で、網代は宇治の名物だからである。タトヒと訓むのもよいが、タトヘも古くから用ゐられてゐるようであるから、舊訓のままにして置く。なほ、この譬を仙覚抄に、ひを待つ意で、日を待つと氷魚待つとをかけたやうに説いてゐるのは、全く古意にはづれてゐる。

○吾在者（ワレナラバ）—宣長は吾と君の誤としてゐる。それでも解けるが、もとのままでも解けるから、改めないことにする。

○今齒王良増木積不來友（イマハヨラマシコヅミナラズトモ）—王は古葉略類聚鈔に生とあるが考に世の誤としたのにより、又、來も成の誤としたのによつて、かく訓むことにした。或いは他にも誤字があるのかも知れない。木積（コヅミ）は流れ寄る塵芥をいふ。木積成（コヅミナス）（二七二四）・縁木積成（ヨルコヅミナス）（四二一七）・與流許都美（ヨルコヅミ）（四三九六）などの例がある。古義に卷十四に奈流世呂爾木都能余須奈須（ナルセロニコヅノヨスナス）（三五四八）とあるによつて、コヅと訓んだのはよくない。

【評】 誤字があるのであらう。少しく難解の點があるのは惜しい。

3. 御馬の名人「王良」について

私たちが提案する解釈のキーワードである「王良」は、古代中国の春秋時代（B.C.770-403）に晋の大夫趙鞅に仕えた有名な御者である。しかしながら、彼については『孟子』、『荀子』、『韓非子』、『淮南子』などの文献に御馬の名人としてわずかに登場するだけであり、出自や生没年など詳しいことは伝わっていない。以下ではまず文献に登場する「王良」について紹介した後、彼がカシオペア座の β 星にその名をとどめている理由について述べる。なお、文献には「王良」の字（あざな）である「於期（おき）」という名前でも数箇所が登場するが、これについては以下では省略した。

3. 1 『孟子』滕文公章句下（巻六）

昔者、趙簡子、王良をして嬖奚（へいけい）と乗らしむ。終日にして一禽をも獲ず。嬖奚、反命して曰く、天下の賤工なり、と。或ひと以て王良に告ぐ。良曰く、請ふ、之を復（ふた）たびせん、と。彊（し）いて後に可（き）く。一朝にして十禽を獲たり。嬖奚、反命して曰く、天下の良工なり、と。簡子曰く、我、女（なんじ）と乗ることを掌（つかさど）らしめん、と。王良に謂ふ。良可（き）かずして曰く、吾、之が爲に我が馳驅（ちく）を範すれば、終日にして一禽をも獲ず。之が爲に詭遇すれば、一朝にして十を獲たり。詩に云ふ、其の馳することを失はざれば、矢を舍（はな）ちて破るが如し、と。我小人と乗ることを貫（ぬ）はらず。請ふ、辭せん、と。御者すら且つ射る者と比するを羞づ。比して禽獸を得ること、丘陵の若しと雖も、為さざるなり。道を枉（ま）げて彼に従ふが如きは何ぞや。且つ子過（あやま）てり。己を枉ぐる者は、未だ能く人を直くする者有らざるなり、と。

○「趙簡子」は晋の大夫趙鞅のこと。簡子はその諡（おくりな）。

○「嬖奚」は「お気に入りの家来」のこと。「嬖」は「寵臣」の意味で、「奚」がその名。

○「之を復びせん」は、再び嬖奚の馬車を操縦して獵に出かけること。

○「詭遇」は「御者の法を廃して、ひたすら射る者の意に遇うように馬を駆けさせる」こと。

○ここでは、孟子の弟子である陳代は、先生が自分から諸侯に面会を求めようとしないことに対して、「尺を枉げて尋を直くす」（一尺を曲げて八尺（一尋）をまっすぐにできればよい）という古の功利思想をもちだして面会を勧めるが、孟子はこれに対して「王良のような御者でさえも自分のやり方を曲げたりはしない」といって陳代の功利思想を批判している。

（参考文献 [7]、pp. 199-202）

3. 2 『荀子』王霸篇第十一（巻第七）

羿（げい）・蜂門なる者は、善く射を服す者なり。王良・造父なる者は、善く馭を服する者なり。聰明君子なる者は、善く人を服する者なり。人服して勢之に従ひ、人服せずして勢之を去る、故に王者は人を服するに已む。故に人主善射の速きを射て微に中（あ）つるを得んと欲すれば、即ち羿・蜂門に若くは莫く、善馭の速きに及びて速きを致すを得んと欲すれば、即ち王良・造父に使ふに若くは莫く、天下を調査して秦・楚を制するを得んと欲すれば、即ち聰明君子に若くは莫し。

○羿と蜂門はともに弓の名人。王良と造父はともに御馬の名人。

○「人を服するに已む」は「人々を屈服させることを最高目標として努力する」の意。

（参考文献 [8]、pp. 313-314）

3. 3 『韓非子』備内（第十七）

故に王良の馬を愛し、越王勾踐の人を愛せしは、戦ふと馳するとの為なり。医の善く人の傷を吮(す)ひ、人の血を含むは、骨肉の親あるに非ず、利の加はる所なればなり。故に輿人（よじん）輿を成して、則ち人の富貴ならむことを欲し、匠人（しょうじん）棺を成して、則ち人の夭死せむことを欲す、と。輿人仁にして、匠人賊なるに非ず、人貴からずば則ち輿售（う）れず、人死せずば則ち棺買はれず、情人を憎むに非ず、利人の死するに在ればなり。

○「乱資多からむ」は「(お家騒動のような) 乱の種はつきない」の意。

○「輿人」は「車を造って生計をたてる人」。

○「匠人」は「棺を造って生計をたてる人」。

○ここでは、人間行動の原理は「利を求める」ことであり、道徳や愛情ではないことが説かれている。

(参考文献 [9]、pp. 196-198)

3. 4 『韓非子』外儲説右上（第三十四）

或るひと曰く、景公は勢を用ふることを知らず、而して師曠（しこう）・晏子（あんし）は患を除くことを知らず。夫れ獵は車輿の安きに託し、六馬の足を用ひ、王良をして轡（たづな）を佐けしめば、則ち身勞せずして輕獸に及び易し。今、車輿の利を釋（す）て、六馬の脚と王良の御を捐（す）てて、下り走りて獸を逐はば、則ち樓季（ろうき）の足と雖も、時の獸に及ぶ無からむ。良馬固車に託せば、則ち臧獲（ぞうかく）も余り有らむ。

○「景公」は春秋時代の斉国の第25代目の君主。

○「師曠」は春秋時代の晋の平公に仕えた楽人で、盲であったが琴の名手。

○「晏子」は晏嬰（あんえい）の尊称で、春秋時代の斉の政治家。靈公、莊公、景公の三代に仕えた。

○「樓季」は文脈からして「足の速い名人」だと思われるが、未詳。

○「臧獲」は「奴隸や無知の愚者」。

○ここでは「勢（権勢）」をうまく利用することの重要性が説かれている。

(参考文献 [10]、pp. 549-550)

3. 5 『韓非子』外儲説右下（第三十五）

患は王良・造父が車を共にし、田連（でんれん）・成竅（せいきょう）が琴を共にするに在り。

（賞罰の権限を君主と臣下が共有した場合の弊害の例には、王良と造父とが一つの車を御する話、田連と成竅とが一つの琴を弾ずる話がある。）

○田連と成竅はともに琴の名手。

(参考文献 [10]、pp. 586-587)

故に王良・造父は、天下の善く御する者なり。然れども王良をして左革を操りて之を叱咤せしめ、造父をして右革を操りて之を鞭笞せしめば、馬十里をも行くこと能はじ。共にするが故なり。田連・成竅は、天下の善く琴を鼓（ひ）く者なり。然れども田連上を鼓き、成竅下を轂（お）さば、曲を成すこと能はじ。亦共にするが故なり。夫れ王良・造父の巧を以てするも、轡を共にして御すれば、馬を使うこと能はず。人主安んぞ能く其の臣と権を共にして以て治を為さむ。田連・成竅の巧を以てするも、琴を共にしては曲を成すこと能はず。人主又安んぞ能く臣と勢を共にして以て功を成さむや。

(参考文献 [10]、pp. 590-592)

今王良・造父車を共にし、人ごとに一邊の轡を操りて門閭に入らば、駕必ず敗れて、道至らざらむ。今、田連・成竅琴を共にし、人ごとに一絃を撫して揮はば、即ち音必ず敗れて、曲遂げじ。

○門閭（もんりょ）は町や村の門。

（参考文献 [10]、pp.595-596）

3. 6 『韓非子』難勢（第四十）

且夫れ百日食はずして、以て梁肉を待たば、餓者は活きざらむ。今堯（ぎょう）・舜（しゅん）の賢を待ちて、乃ち当世の民を治むるは、是れ猶梁肉を待ちて、餓を救ふの説なり。夫の、良馬固車も、臧獲之を御せば、則ち人の笑と為り、王良之を御せば、則ち日に千里を取らむ、と曰ふことは、吾以て然りと為さず。夫れ越人の遊を善くする者を待ちて、以て中国の溺人を救はば、越人善く遊（およ）ぐも、而も溺人は濟（すく）はれざらむ。夫の古の王良を待ちて、以て今の馬を馭せしむるものは、亦猶越人溺を救ふの説のごときなり。不可なること亦明かなり。夫れ良馬固車は、五十里にして一置し、中手をして之を御し、速かなるを追ひ遠きに致らしめば、以て及ぶ可くして、千里も日に致る可きなり、何ぞ必ず古の王良を待たむや。且御は王良に使むるに非ずば、則ち必ず臧獲に使めて之を敗り、治は堯・舜に使むるに非ずば、則ち必ず桀（けつ）・紂（ちゅう）に使めて之を乱さむというは、此れ味は飴蜜に非ずば、必ず苦菜・亭歷とするなり。此れ則ち積弁累辞、理を離れ術を失へる、両末の議なり。奚（なん）ぞ以て夫の道理の言を難ず可けむや。客の議は未だ此の論に及ばざるなり。

○「梁肉」は「うまい飯と肉」の意で「美食」のこと。

○「堯」と「舜」は中国の神話時代の理想的な聖天子。

○「越人」は中国南方の越国の人。海辺に近いので泳ぎの巧い人が多かった。

○「桀」と「紂」はともに暴君の代名詞。桀は夏王朝の最後の君主。紂は殷王朝の最後の君主。

○「苦菜」と「亭歷」はともに食用植物で、苦みのある菜と芹。

○ここでは、「堯・舜」のような名君や王良のような御馬の名人はたまにしか現れないので、このような名君や名人の出現を待っていたのでは現実の政治はできない、（したがって中程度の能力のある凡人が「法」と「術」によって「勢（権勢）」を維持することが重要だ）ということが説かれている。

（参考文献 [10]、pp.715-717）

3. 7 『淮南子』覽冥訓（巻七）

昔、王良・造父の御するや、車に上りて轡（たづな）を攝（と）れば、馬、整齊して歛諧（れんかい）するを為し、足を投げて調均し、勞逸一なるが若く、心怡（よろこ）び氣和ぎ、體は便にして軽く畢（はや）く、勞に安んじ進むを楽しみ、馳騖（ちぶ）すること滅するが若く、左右すること鞭の若く、周旋すること環の若し。世皆以て巧と為す。然れども未だ其の貴き者を見ざるなり。

（参考文献 [11]、pp.304-306）

3. 8 『淮南子』主術訓（巻九）

是の故に、権勢は人主の車輿なり。大臣は人主の駟馬なり。體は車輿の安きを離れ、手は駟馬の心を失ひて、而も能く危からざるは、古今未だ有らざるなり。是の故に、輿馬調はざれば、王良も以て道を取るに足らず、君臣和せざれば、唐虞（とうぐ）も以て治を為すこと能はず。

○「唐虞」は堯帝と舜帝のこと。

（参考文献 [12]、pp.439-441）

故に伯楽之を相し、王良之を御し、明主之に乗れば、御相の労なくして千里を致すは、人の資に乗りて、以て羽翼と為せばなり。

(つまり伯楽が馬を見立て、王良が御者となり、明主はこれに乗るという次第、明主が御したり見立てたりの労もなくて千里を馳せるのは、人の才を利してわが羽翼とするからである。)

(参考文献 [8]、pp.443-445)

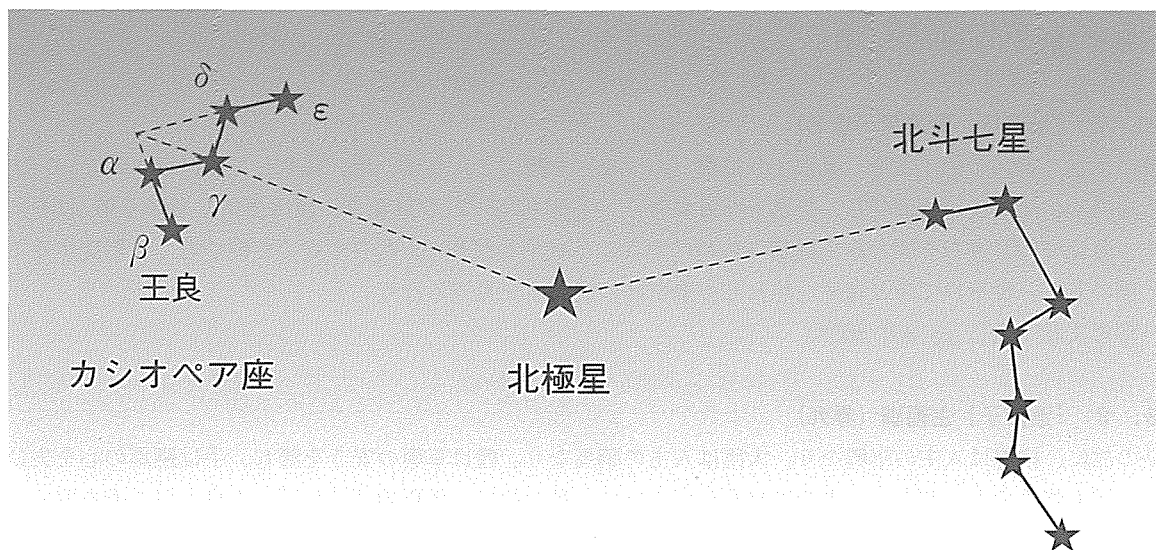
3. 9 カシオペア座の「王良」星

以上で見てきたように、文献の中では、「王良」は「造父」と並んで春秋時代の御馬の名人と見なされているが、一方では「王良」はカシオペア座（仙后座の内）の中の一つの星の名前として今日でもなお生きている。図（1月1日の真夜中の配置図）に示すように、カシオペア座の5つの星のうち片端にある β 星が「王良」星と呼ばれている星である。命名の由来は、この星の形からも想像されるように、 β 星以外の4つの星（ α 、 γ 、 δ 、 ϵ ）が馬車をひく馬に見立てられ、「王良」星（ β 星）が残りの4つの星（馬）を御しながら君主のシンボルである北極星（北辰）の周りをまわっていることをイメージして名づけられたものと思われる。なお中国では、上に示した文献にも見られるように、「馬をうまく御すこと」が「国の政治をうまく行うこと」の譬えとして語り継がれている。

ところで、今問題になっている万葉集の1137番歌を別にすれば、我が国の上代の文献には「王良」は人名としても星の名前としても登場しない。一方、韓国の歴史書「三国史記」には一箇所のみであるが、新羅本紀に次のように星の名前として登場する [13]。

始祖・赫居世居西干・九年（B.C.四九）三月、李星（彗星）が王良に現われた。

ちなみに、わが国の古代の「星」にまつわる説話は、万葉や懷風藻の七夕伝説、丹後国風土記逸文の浦島子伝説など、いずれも中国伝説の傍流であって、諸外国の伝説や文学に比べて星のことが出てくる機会が概して少なく、明星（アカホシ）・夕星（ユウツツ）・流星（ヨバヒホシ）などの名がわずかに見える程度である [14]。



4. 新しい訓みと解釈の提案

1137番歌に関する従来の解釈の問題点は、澤瀉久孝が2. 5節の最後で「とにかくこの作は第二句の譬の内容が不明であり第四句の文字に疑問があり、この程度の推測に満足するよりほかない。」と告白しているように、まだ十分に解明されているとはいえない。実際、第四句「今齒王良増」については、2. 2節の新編日本古典文学全集と2. 3節の中西進はともに「今は王良まし」、「今は王良増」のように「訓み」をあえて「保留」している。

そこで私たちは、この問題を「誤字」説（「王」を「与」や「世」の誤字とする説）によらずに解決するために、第四句の「王良」を前節で見てきた御馬の名人の名前と解することを提案する。このような解釈に基づけば、以下のように新しい解決の糸口が見えてくる。まず私たちの結論を示そう。

【原文】氏人之 譬乃足白 吾在者 今齒王良増 木積不來友

【訓読】氏人の 譬への足白 我れならば 今は王良（おほらふ）そ 木積来ずとも

【大意】もし私のことを、よく世間が「氏人（うちひと）」の譬えにする「足白（あじろ）」というのであれば、今の私は、古代中国の名御者「王良」のように大君を補佐する御者なのだぞ、宇治川の網代木に木屑が集まってくるように多くの人々の注目を集めるほどの有名人ではまだないけれど。

○「氏人（うちひと）」は大君に仕える官人たちの意。

○「足白（あじろ）」は、職業がら沓（くつ）ばかりはいているため、一般庶民のように裸足で労働に携わることのない「足が白い軟弱者」の意。おそらく当時の「俗語」であろう。

○「木積（こつみ）」は「木屑や木っ端」の意。

○この歌では、比喩的に、「氏人」の「氏（うち）」が「宇治川」を類推させ、「足白（あじろ）」が同音の「網代」を、「木積（こつみ）」が「宇治川の網代木に集まってくる木屑」を類推させる。

この歌を解釈する上でキーワードとなるのは、まずは「王良」である。「今齒王良増」を「今は王良そ（いまはおほらふそ）」と訓めば8音の「字余り」になるが、単独母音「い」と「お」が含まれるので「本居宣長の字余りの法則」（参考文献[1]、p.336）には反しない。

そのほかのキーワードとして「氏人」、「足白」、「木積」の三つがある。まず「氏人」から考えよう。「氏人」は、従来の解釈ではすべて例外なく「宇治人」と訓まれ、「（今の京都府の）宇治地方に住んでいる人」という意味に解されてきた。もちろん、第1節に掲載した三つの歌（1136、1138、1139）にも見られるように、「宇治川」を表現するのに「氏河」や「氏川」という表記が用いられており、「氏人」の「氏（うち）」には同音の「宇治（川）」の意味が含まれていることは疑いない。しかし、ここではこれがメインの意味ではない。まずこのことを明確にしよう。万葉集の中に「うちひと」という訓みを含む歌は、今の1137番歌を別にすれば、次の二例があるのみである。いずれも「八十氏人」という形で登場する。

1022 父君に 我は愛子ぞ 母刀自に 我は愛子ぞ 参上る 八十氏人の 手向する 恐（かしこ）の坂に 幣奉り 我はぞ追へる 遠き土左道を

4100 もののふの 八十氏人も 吉野川 絶ゆることなく 仕へつつ見む

まず後者の4100番歌から見ると、この歌の結句に「仕えつつ」とあることから、「八十氏人」は大君（天

皇)に仕える官人たちを指していることは明らかである。実際、この4100番歌は4098番歌(長歌)の第二反歌であるが、長歌の中に「... もののふの 八十伴の男も 己が負へる 己が名負ひて 大君の 任けのまにまに ...」とあることから、「八十伴の男」と「八十氏人」は同じ意味であり、いずれも大君に仕える官人たちを指していることがわかる。次に1022番歌について見ると、この歌だけからは「八十氏人」が具体的に誰を指しているかは必ずしも明確ではないが、「参上る」(都へ上る)という表現に着目すれば、やはりこの歌の「八十氏人」も4100番歌と同じく大君に仕える官人たちを指していると考えてよいだろう。だとすると、今問題になっている1137番歌の「氏人」も、「宇治地方に住んでいる人」というよりはむしろ「大君に仕える官人たち」を指している可能性の方が高い。実際、「氏人」という表記が「宇治地方に住んでいる人」という意味で用いられた例は、万葉集・古事記・日本書紀のいずれにも存在しない。ただし、続日本紀の天平勝宝元年(749)十二月二十七日の条に「是日、百官及諸氏人等咸會於寺。」(この日、百官と諸氏の人らと咸く寺に会ふ)とあるので[15]、ここでは明らかに「百官」と「諸氏人」が区別されており、「氏人」が必ずしも「官人」を意味しない場合もあることに留意する必要がある。

次に「足白」について考えよう。従来の解釈では、「足白」は「網代(あじろ)」と訓まれ、「川の瀬に設けて魚とりに用いられる仕掛け」の意味に解されてきた。万葉集の中に「あじろ」という訓みを含む歌は、今の1137番歌を別にすれば、これもまた二例があるのみである。一つは次の歌である。

0264 物乃部能 八十氏河乃 阿白木尔 不知代経浪乃 去辺白不母

もののふの 八十字治川の 網代木に いさよふ波の 行くへ知らずも

この歌の原文では「あじろ」は「阿白」と表記されている。またもう一つの例は、すでに第1節に掲載した1135番歌であり、ここでは「阿自呂」と表記されている。この二つの例において、「阿白」あるいは「阿自呂」と表記された「あじろ」はいずれも「網代」の意味である。このことは歌の内容からして疑いない。しかし、「足白」という表記は、今問題になっている1137番歌のほかには用例がない。古事記・日本書紀はもとより六国史にも用例がない。したがって、「足白」が(音は同じでも)「網代」を意味するかどうかは必ずしも自明なことではない。むしろ「足白」を従来のように「網代」と解すると、澤瀉久孝が2. 5節の最後で述べているように「とにかくこの作は第二句の譬の内容が不明であり」という結果になってしまう。

そこで、私たちは「足白」を文字通り「足が白い」という意味に解する説を提案したい。ただし、これには比喩的に同音の「網代」の意味ももちろん含まれているが、これがメインの意味とは考えない。「足が白い」というのは、当時の官人たちは一般庶民とはちがって沓(くつ)ばかり履いて農業や林業や漁業などの労働に携わることが少なかったので、「弱々しい」を意味する多少軽蔑的な表現だと思われる。現代風に言えば「肌が白い」がこれに相当し、当時の男たちのモットーとする「丈夫(ますらお)」の「たくましさ」とは逆の意味をもつ表現であろう。したがって、「足白(あじろ)」は今風に言えば「軟弱者」の意味だと思われる。この意味での用法はほかに例がないが、おそらく当時の「俗語」に類する表現であろう。ちなみに、当時の官人たちが沓を履き庶民の多くが裸足だったことは、すでに7世紀始めの「隋書」の次の記述からも推測することができる[16]。

... 履は屨形(くけい)の如く、その上に漆り、これを脚に懸く。人庶多くは跣足。...

(履きものは、木くつの形のように、その上に漆をぬり、これを履く。庶民の多くははだし。)

また万葉集の中にも「くつ（沓、履）」に言及した歌が次の四首ある。

0800 ... うけ沓を 脱きつるごとく 踏み脱きて 行くちふ人は ...

1807 ... 髪だにも 搔きは梳らず 履をだに はかず行けども ...

3399 信濃道は 今の壘り道 刈りばねに 足踏ましなむ 沓はけ我が背

3791 ... 飛ぶ鳥の 明日香壮士が 長雨忌み 縫ひし黒沓 刺し履きて ...

最後に「木積（こつみ）」について考えよう。万葉集の中で「こつみ」と訓まれる歌は、今の1137番歌を除くと、原文に「木積」と表記されている例が二つ、「許都美」と万葉仮名で表記されている例が一つ、計三首ある。

2724 冷風之 千江之浦廻乃 木積成 心者依 後者雖不知
秋風の 千江の浦廻の こつみなす 心は寄りぬ 後は知らねど

4217 宇能花乎 令腐霖雨之 始水迹 縁木積成 将因兒毛我母
卯の花を 腐す霖雨の 始水に 寄るこつみなす 寄らむ児もがも

4396 保理江欲利 安佐之保美知尔 与流許都美 可比尔安里世波 都刀尔勢麻之乎
堀江より 朝潮満ちに 寄るこつみ 貝にありせば つとにせましを

この三つの歌における「こつみ」は、いずれも「木屑」あるいは「木っ端」の意味で用いられている。したがって、今問題になっている1137番歌の「木積」もまた「木屑」あるいは「木っ端」の意味と解して問題ないであろう。以上のことを考慮して1137番歌を総合的に解釈すれば、この節のはじめに記した【大意】のような内容となる。

最後に、少々「深読み」のきらいはあるが、「木積」の解釈を（「木屑や木っ端」という意味も含ませた上で）文字通りの意味「山の木を伐って運んできて積み上げる」として次のように解釈することも可能であることを指摘しておきたい。

【大意】もし私のことを、よく世間が「氏人（うちひと）」の譬えにする「足白（あじろ）」というのであれば、今の私は、古代中国の名御者「王良」のように大君を補佐する御者なのだぞ、木を運んできて積み上げたりする力仕事はできなくても... 宇治川の網代木に木屑が集まってくるように多くの人々の注目を集めるほどの有名人ではまだないけれど。

あくまでも憶測であるが、「木積む＝こつむ」という語は（「上代語」には登場しないが）、もともとは「木を一本ずつ運んできて積み上げる」の意味であり、これを別の観点から見れば、「木が一箇所にとんどん寄ってくる」ことであり、ここから「派生」して「（川辺や海辺に木屑などが）寄ってくる」ことを意味するようになり、その名詞形「こつみ」が「木屑や木っ端」を意味するようになったのであろう。実

際、台風の後などに、川辺や海辺に多数の「木の切れ端」が「寄せ集まっている」光景をよく目にする。つまり、「木を積み上げること」と「木屑が寄せ集まってくること」は似たような現象を別の視点からとらえただけで、もとは同じである。したがって、万葉集のわずか三例をもとに、「こつみ」という語を単に「木屑や木っ端」という意味だけに限定する必要はなく、「木積」という表記が用いられている以上、「木を伐り運んできて積み上げる」という直接的な意味も込められているのかも知れない。ただし、このような意味での用例は万葉集に一例も存在しない。

5. おわりに

この論文では、これまで難訓とされてきた第四句「今齒王良増」を含む1137番歌について、新しい解釈を提案した。すなわち、この句の「王良」を古代中国の春秋時代に活躍した名御者の名前とする解釈である。もしこの解釈が正しいとすれば、奈良時代の初めの官人たちが『孟子』、『荀子』、『韓非子』、『淮南子』などの文献を読んでいたことがわかるだけでなく、実際に歌に読み込まれているという事実を考えると、当時の人々（多くの官人たち）の間に「王良」という御者の話が十分知れ渡っていたことが推測される。というのは、もしそうでなければこの歌の意味は理解できないし、率直な歌を作る万葉人たちの特性からして人々に理解できないような歌を作るはずはなく、まして後の万葉集の編纂者が自ら理解できないような歌を万葉集に採集したとは考えられないからである。

万葉集の中には中国から入ってきた「七夕伝説」に基づく七夕の歌が多数含まれているが、1137番歌の「王良」の歌もまた古代中国の伝説の影響を受けて作られたものであろう。

6. 参考文献

- [1] 「萬葉集二」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp.127-128、2000年。
- [2] 「萬葉集②」、新編日本古典文学全集、小学館、p.204、1995年。
- [3] 「万葉集原文付全訳注（二）」、中西進、講談社文庫、p.100、1980年。
- [4] 「萬葉集二」、日本古典文学大系、岩波書店、p.213、1959年。
- [5] 「萬葉集注釋卷第七」、澤瀉久孝、中央公論社、pp.84-85、昭和35年。
- [6] 「萬葉集全釈第二冊」、鴻巣盛廣、大倉廣文堂、p.333（991）、昭和6年。
- [7] 「孟子」、内野熊一郎、新釈漢文大系4、明治書院、昭和37年。
- [8] 「荀子」、藤井專英、新釈漢文大系5、明治書院、昭和41年。
- [9] 「韓非子上」、竹内照夫、新釈漢文大系11、明治書院、昭和35年。
- [10] 「韓非子下」、竹内照夫、新釈漢文大系12、明治書院、昭和39年。
- [11] 「淮南子上」、楠山春樹、新釈漢文大系54、明治書院、昭和54年。
- [12] 「淮南子中」、楠山春樹、新釈漢文大系55、明治書院、昭和57年。
- [13] 「完訳三国史記」、訳：金思煒、明石書店、p.14、1997年。
- [14] 「時代別国語大辞典上代編」、三省堂、p.654、2005年。
- [15] 「続日本紀三」、新日本古典文学大系、岩波書店、p.97、1992年。
- [16] 「魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝」、石原道博、岩波書店、p.69、1951年。